

運慶「無著世親像」— 人を彫るまなざし



国宝 世親立像（弟）左 国宝 無著立像（兄）右

焼け跡から立ち上がる祈り—運慶の魂

興福寺は、天平の創建以来、藤原氏の祈りと国家の精神を支える「日本の中心」であった。しかし、治承四年の南都焼討によって、堂塔は灰燼に帰し、仏像は溶け落ち、祈りの場は完全に消滅した。その焼け跡に立ち尽くした人々が見たのは、かつての天平文化の華麗さではなく、「祈りそのものが失われた」という深い喪失感であった。

この絶望の中で、ひとりの若い仏師—運慶が立ち上がった。

彼は、焼け落ちた興福寺を前にして、「古代の仏を復元する」のではなく、「新しい祈りを刻む」ことを選んだ。それは、天平の貴族的な美ではなく、武士の時代にふさわしい、生身の人間の息づかいを持つ仏像であった。興福寺の復興は、単なる建物の再建ではない。焼け跡から立ち上がる「祈りの再生」であり、その中心に運慶の魂があった。

CONTENTS

第1章 若き運慶の最高傑作 — 国宝 大日如来坐像（円成寺蔵）	4
第2章 南都焼討と運慶 — 焼け落ちる興福寺を前に	5
第3章 興福寺北円堂の再建と諸像造立	5
1 国宝 北円堂（八角円堂）	5
2 国宝 弥勒如来坐像 北円堂本尊 像高 142 cm 寄木造、彩色、彫眼、桂材	7
3 国宝 木造無著・世親立像 — 人を彫るという到達点 寄木造、彩色、玉眼、桂材	7
第4章 興福寺 国宝四天王 四組	8
1. 北円堂安置：木心乾漆四天王立像	8
① 制作時期と来歴	8
② 作者と制作技術	8
③ 大きさと像容（特徴）	9
2. 東金堂安置：木造四天王立像	9
① 制作時期と来歴	9
② 作者と制作技術	9
③ 大きさと像容（特徴）	10
3. 南円堂安置：木造四天王立像（康慶一門）	10
① 制作時期と来歴（寺歴）	10
② 作者と制作技術	10

③ 大きさと像容（特徴）	11
4. 中金堂安置：木造四天王立像（運慶工房・旧伝北円堂像）	11
① 制作時期と来歴（寺歴）	11
② 作者と制作技術	11
③ 大きさと像容（特徴）	12
5. 興福寺 四天王立像 4 組の比較	12
第 5 章 唯識思想と無著・世親立像 ―興福寺北円堂における思想的造形の意味―	15
1. 唯識思想の基本構造：心がつくる「像」としての世界	15
2. 平安末期の興福寺と唯識思想：不安の時代における知的支柱	16
① 運慶自身の思想的深化	16
② 無著・世親 二立像の視線が象徴する唯識思想の二つの仕事	16
③ 北円堂の二像は唯識思想の視覚的結晶である	17
追補 1180 年南都焼討以降 奈良における運慶が関係した彫像・造像事業（時期順一覧）	18
1180～85 年：南都焼討直後の復興期（運慶 30 代前半）	18
1186～95 年：復興事業への本格的参加（運慶 30 代後半～40 代前半）	18
1196～1200 年：興福寺北円堂造像準備期間（運慶 40 代後半）	18
1201～08 年：東大寺南大門金剛力士像造立と興福寺北円堂の完成期（運慶 50 代）	18
1212 年 北円堂諸仏の完成（運慶 50 代後半）	18

第1章 若き運慶の最高傑作 ― 国宝 大日如来坐像（円成寺蔵）

1176年（安元2年）、運慶は父・康慶とともに円成寺の大日如来坐像の制作に携わった。この像は、運慶の現存する作品の中で最古の墨書銘を持ち、彼の初期作として位置づけられる重要な造像である。造像の裏には「大仏師康慶、実弟子運慶」という墨書銘が残されている。この大日如来像には、後の運慶作品に見られる「写実性」「量感」「精神性」の萌芽が確認できる。特に面相の柔らかな肉取りや、眼の奥にわずかな陰影を与える表現は、後年の無著・世親像に通じる“人間的表現”の原点と評価されている。

円成寺の『寺縁起』には「後白河法皇が仏工運慶に仰せて金剛界の大日如来を造らしめ、当山に安置し、或は仏舎利に多宝の金塔を寄附せさせましまける」とある。

運慶は、1150年頃の生まれと思われるが、当時の年齢は20代後半であった。父・康慶の工房で天平彫刻の伝統を学びながら、同時に新しい造形理念を模索していた。天平彫刻は、均整の取れた量感と静謐な精神性を特徴とするが、運慶はそこに「人間の内面を彫る」という新たな視点を加えようとしていた。

大日如来坐像は、単なる仏像ではなく、運慶が初めて「生命の鼓動」を木に宿した作品である。寄木造の技法を駆使し、面部の肉取りに微妙な起伏を与え、眼差しにわずかな陰影を差し込むことで、像は静かに呼吸するかのような存在感を獲得した。この作品は、後の無著・世親像に通じる「人間的表現」の萌芽であり、運慶が仏像を“人格を持つ存在”として捉え始めた最初の到達点といえる。

- 国宝「大日如来坐像」木造、漆箔、高98.8cm 運慶作 円成寺蔵



第2章 南都焼討と運慶 — 焼け落ちる興福寺を前に

1180年（治承4年）12月に発生した南都焼討は、奈良の宗教都市を壊滅させた未曾有の事件であり、興福寺及び東大寺の伽藍は主要部のほとんどを焼失した。

南都焼討の根本要因は、興福寺・東大寺が平家政権に対し明確な反抗姿勢を示したことにある。1180年春、後白河法皇の皇子・以仁王が全国の源氏に平家討伐を促す令旨を発した。これに呼応したのが、奈良の大寺院を基盤とする僧兵勢力であった。興福寺は藤原氏の氏寺として強大な政治力を保持していたが、平家の台頭によりその権威が脅かされると、反平家の立場を強めていった。僧兵は奈良坂・般若坂に防衛線を築き、平家の使者を侮辱するなど、武装勢力としての行動を活発化させていた。平家にとって南都は、単なる宗教勢力ではなく、武装した反乱拠点として認識されていたのである。

平重衡率いる平家軍は、興福寺の僧坊を焼き払うことで僧兵の抵抗力を削ぐ意図があったが、当日は強風が吹き荒れ、火勢は平家の想定を超えて奈良一帯に延焼した。東大寺の大仏殿を含む中枢伽藍が焼失したのは、この延焼による偶発的要素が大きいとされる。結果として、南都は宗教都市としての機能をほぼ完全に失い、奈良の中心部は黒焦げの荒野と化した。

この壊滅的状况を、当時の年齢30代前半の運慶は直接目にしたと考えられる。南都焼討は、運慶にとって「祈りの場の消滅」を目の当たりにする体験であり、後の造像理念に影響を与えた可能性が高い。

第3章 興福寺北円堂の再建と諸像造立

Ⅰ 国宝 北円堂（八角円堂）

興福寺北円堂は、藤原不比等の一週忌にあたる721年（養老5年）に元明・元正天皇によって創建された。そこは、平城京を一望できる場所に



位置し、平城京造営の推進者である藤原不比等の霊を慰めるには最良の地とされた。

しかし、1180年（治承4）の南都焼討により、興福寺北円堂は堂宇・諸像ともに全焼し、奈良時代以来の円堂空間は完全に失われた。北円堂の初期の再建は、復興事業の中でも極めて早期に着手され、1186年（文治2）頃には一旦完了したと推定される。これは、興福寺が藤原氏の氏寺として政治的象徴性を保持していたこと、また北円堂が伽藍の精神的中心であったことから、優先度が高く設定されたためと考えられる。

その後、1210年（承元4年）頃に再び、再再建（現在の建物）が進められた。この時期に運慶一門の仏師たちが諸仏の造立を手がけ、1212年（建暦2年）頃に北円堂の諸仏が再興された。再建された北円堂は、奈良時代創建の円堂形式を踏襲しつつ、鎌倉初期の建築技術を導入した点に特徴がある。八角円堂という形式自体は古代以来の伝統を保持するが、和様を基調としながら、初期鎌倉建築特有の量感ある軸部と安定した架構を備えている。柱間は均整が取れ、内陣は中央に本尊を安置し、周囲に諸像を環状に配置する古式の伽藍構成を継承している。屋根は八角形の寄棟造で、外観は奈良時代の円堂の意匠を再現しつつも、部材の太さや組物の簡略化など、鎌倉初期の合理的な建築技法が反映されている。

右図は現在の北円堂

この再建北円堂は、単なる旧堂の復元ではなく、古代的形式の継承と鎌倉的技術の融合という建築史上の過渡期を示す建造物として評価されている。南都焼討によって失われた古

代伽藍の象徴性を回復しつつ、新たな政治権力（源頼朝政権）の支援を受けた復興事業の成果として、北円堂は鎌倉初期の宗教空間の典型を示す。 右図は現在の北円堂内陣



2 国宝 弥勒如来坐像 北円堂本尊 像高 142 cm 寄木造、彩色、彫眼、桂材

北円堂の本尊像で、弥勒菩薩が56億7千万年後に成仏した姿を表している。通常、弥勒は菩薩の姿で表わされるが、成仏することで、如来となる。像内には1212年（建暦2年）の年号が書かれた願文などが納入されており、台座内枠には源慶、静慶、運賀、運助、運覚、湛慶、康弁、慶運、康勝ら慶派仏師の名が墨書されている。源慶が中心になって造られたが、彼らを統率していたのが巨匠運慶であり、運慶晩年の名作として知られる。

脇侍に法苑林(ほうおんりん)菩薩像と大妙相(だいみょうそう)菩薩像(共に室町時代 桧材、寄木造、漆箔、玉眼)を従える。

3 国宝 木造無著・世親立像 — 人を彫るという到達点 寄木造、彩色、玉眼、桂材

とりわけ北円堂の無著・世親立像は、焼失した仏像群の“空白”を埋める象徴的作品であり、写実性と精神性を極限まで高めた造形は、南都焼討後の復興という歴史的文脈を抜きに語ることはできない。弥勒如来坐像の両脇に立つ二像は、寄木造、彩色、玉眼を駆使し、写実性と精神性を深く掘り下げた造形である。

無著立像：像高194.7cm、老年の相、右下を見つめる

世親立像：像高191.6cm、壮年の相、左遠方を見つめる

無著立像の伏し目がちな眼差しは、深い慈悲と静かな思索を湛え、

世親立像の遠くを見る眼差しは、理を求め続ける知性と未来への希望を示す。

この「視線の方向の違い」は、兄弟の思想的立場の差異を象徴すると同時に、運慶が人間の内面を彫り分けた証左である。「人間の内面を彫る」という造像理念を確立し、慶派の技法を新たな段階へと押し上げた。

運慶は、二像を単なる仏像ではなく、興福寺復興の精神的支柱として彫り上げたのである。

そして、日本彫刻史における“人間表現の到達点”として、今も静かに立ち続けている。

第4章 興福寺 国宝四天王 四組

2026年9月現在、興福寺には国宝指定の四天王立像が四組伝わる。制作時代順には、北円堂（木心乾漆像）、東金堂（木造寄木造像）、南円堂（木造寄木造像）、中金堂（木造寄木造像）の順になると考えられる。

Ⅰ. 北円堂安置：木心乾漆四天王立像

① 制作時期と来歴

- 制作時期：791年（延暦10年）4月造立 時代区分としては、桓武天皇の平城京期末（平安遷都は794年）にあたり、奈良時代末期の作風を色濃く残すが、文献では平安初期とされることが多い。
- 来歴：もとは興福寺の堂宇にあったものではなく、大安寺に安置されていた。増長天・多聞天の台座裏面に「大安寺四天王像、延暦十年四月」の墨書があり、1285年（弘安8年）に興福寺の僧・経玄によって修理された記録が残るため、鎌倉期に興福寺北円堂へと移されたことが判明している。

② 作者と制作技術

- 作者：不詳 当時の大安寺造工官、あるいは官大寺の専門仏師集団と推測される。
- 制作技術：木心乾漆造、漆箔、彩色。天平盛期の純粋な脱活乾漆像から一歩進み、大まかに削り出した木心の上に、漆に木粉などを混ぜた「乾漆粉」を盛り上げて細部を成形する技法である。本作は天平期の掉尾を飾る乾漆像と言われ、平安期に入ると乾漆像の制作は急速に途絶える。その理由として、高価な漆を大量に使用すること、乾燥に時間を要すること、造形に高度な熟練が必要なこと、大規模な工房体制が必須であることなどが挙げられる。つまり、天平期の国家的造像事業だからこそ可能だった技法であり、桓武天皇以降の財政緊縮政策下では維持できなくなったため、平安初期の造像技術は木彫・寄木造へと移行していった。

③ 大きさと像容（特徴）

- 像高： 持国天 136.6cm、増長天 136.6cm、広目天 139.7cm、多聞天 134.7cm
- 像容： 像高130cm台と、南円堂や中金堂の四天王像に比べて小ぶりであるが、天平彫刻特有の量感のある体躯とどっしりとした重量感をたたえている。乾漆独特の肉厚で柔らかな質感を残しつつも、平安初期特有の厳めしい表情を醸し出している。また、衣文の流れが大きく連続的であり、天平の典型的な翻波式（ほんぱしき）の表現も見られる。

2. 東金堂安置：木造四天王立像

① 制作時期と来歴

- 制作時期：興福寺に現存する四天王像の中で、北円堂（791年）に次ぐ古さを持つ木造であり、奈良時代の乾漆造から、平安初期の木造へ移行する時期の代表作といわれる。日本の木造四天王像の中でも最古級に属するが、ただし、日本最古の木造四天王像としては、法隆寺金堂に安置される四天王立像であると考えられている。
- 来歴：興福寺は火災が多く、東金堂も複数回焼失しているが、当初から本尊・薬師如来像の守護像として焼失を免れ、東金堂像群として一貫して伝来してきたと考えられている。現在の東金堂は室町時代・応永年間（1415年頃）再建だが、四天王像はそれより約500年以上古い像で、堂の再建をまたいで安置され続けた古像である。

② 作者と制作技術

- 作者：不詳 南都（奈良）系の仏師集団による制作であり、奈良時代の乾漆造像の伝統を継ぎつつ、木造化を進めた工房であることが推測される。
- 制作技術：木造（桧材）、寄木造、彩色、黒漆（瞳孔）
平安初期はまだ一木造から寄木造へ移行する過渡期で、東金堂像は「胴体を大きく一材で取り、頭部・腕部を別材で接ぐ」など、寄木造の原初的構造を示す。また、内割り（うちぐり）してあり、像内を割り抜いて軽量化す

る技法がすでに導入されている。現在はほぼ剥落しているが、当初は赤・緑・金を基調として鮮やかに彩色されており、甲冑には截金（きりかね）も施されていた可能性が高い。

③ 大きさと像容（特徴）

- 像高：持国天 162.5cm、増長天 161.0cm、広目天 164.0cm、多聞天 153.0cm
- 像容：持国天像と増長天像は正面を向き、広目天像と多聞天像は互に内側を向く。像や邪鬼の頭髪、体の一部に漆を盛り上げて肉づけし、瞳には黒漆を用いる。頭上から足下の邪鬼、台座まで一木の桧材で彫出されたために肉太であり、重量感あふれる像である。

3. 南円堂安置：木造四天王立像（康慶一門）

① 制作時期と来歴（寺歴）

- 制作時期：1189年（文治5年）南円堂供養時
- 来歴：1180年（治承4年）の「南都焼討」で被災した興福寺南円堂を復興する際、本尊の不空罽索観音坐像などと共に一具として造立された。その後、長らく「仮金堂（現在の仮講堂）」に安置されていたが、近年の徹底した文献・堂宇調査により、本来の「南円堂像」であることが確定した。2018年の国宝指定と同時に本来の南円堂へと還座された。毎年10月17日の特別開扉でのみ拝観可能。

② 作者と制作技術

- 作者：康慶工房とされる。当時、康慶が生存していたかは不明であるが、実質的な慶派の棟梁は運慶であったと推測される。しかし、運慶は東大寺の重源上人の造像事業と深く関わっており、この南円堂復興にどの程度直接関与できたかは定かではない。
- 制作技術：寄木造、彩色、彫眼、桧材。増長天の框（かまち）部分にのみ、平安初期の古材が転用されているこ

とが判明している。伝統的な古典模倣のなかに、新たな写実主義への足がかりが見られる技法。

③ 大きさと像容（特徴）

- 像高：持国天 204.0cm、増長天 202.2cm、広目天 204.5cm、多聞天 198.0cm
- 像容：2メートルを超える堂々たる体躯である。最大の特徴は、持物が『陀羅尼集經（だらにじっきょう）』という經典の記述に厳格に準じている点である（持国天：左手刀・右手宝珠、増長天：刀と長柄の矛など）。これは南円堂曼荼羅図に描かれた姿とも一致する極めて貴重な「陀羅尼集經様」の四天王像であり、太造りの体型と力強い構えを特徴とする。

4. 中金堂安置：木造四天王立像（運慶工房・旧伝北円堂像）

① 制作時期と来歴（寺歴）

- 制作時期：1212年（建暦2年）頃（鎌倉時代）
- 来歴：1717年（享保2年）の中金堂火災以降、長らく「南円堂」に安置されていたため、古くは南円堂像と誤認されていた。しかし、近年の調査研究により、現在の中金堂像は、運慶一門が1210年前後の北円堂再建時に造立した四天王像であるという説が強く支持されるようになった。2025年東京国立博物館で開催された、特別展「運慶 祈りの空間 興福寺北円堂」でも、本作を北円堂再建時の四天王像として推定し展示が行われた。
- 2018年10月の約300年ぶりの中金堂の再建落慶に伴い、南円堂から中金堂の須弥壇四方に移設、現在では常時公開されている。

② 作者と制作技術

- 作者：運慶と慶派仏師集団（湛慶、康弁、康勝等）。
- 制作技術：寄木造、彩色、彫眼、桂材。2017年のX線CT調査により、芯が残り年輪の細かい木材を3本以上

巧みに組み合わせる技法が、北円堂本尊や無著・世親立像（運慶作）と完全に共通することが判明し、運慶工房作であることの決定的証明となった。

③ 大きさと像容（特徴）

- 像高：持国天 200.0cm、増長天 206.6cm、広目天 197.5cm、多聞天 197.2cm
- 像容：いずれも沓をはき、岩座の上に立ち、今にも動き出しそうな激しい躍動感とダイナミックなポーズが特徴である。増長天像と広目天像は腰を右に、持国天像と多聞天像は腰を左にひねる。特に北方を守護する多聞天（毘沙門天）が、宝塔を左手の掌上ではなく「頭上高くに掲げる」ポーズは、運慶特有の極めて独創的かつ演劇的な空間表現であり、鎌倉再興期における慶派の最高傑作の一つである。
- なお、近年の研究により、像の肉身色などから、従来「持国天」とされていた像が増長天、「増長天」とされていた像が広目天、「広目天」とされていた像が持国天であることが判明している。

5. 興福寺 四天王立像 4 組の比較

安置堂宇	制作年代	主要技法	推定作者	主な特徴・来歴
北円堂	791 年	木心乾漆造	大安寺造工官	元は大安寺の像。乾漆特有の古風で厳かな佇まい。
東金堂	800 年頃	寄木造	南都仏師	東金堂設立当初からの、本尊・薬師如来像の守護像。
南円堂	1189 年	寄木造	康慶工房	陀羅尼集経に準拠した持物。2018 年に本来の南円堂へ還座。
中金堂	1212 年頃	寄木造	運慶工房	元は北円堂。宝塔を高く掲げる多聞天など圧倒的な躍動感。

4 組の国宝四天王立像は、奈良時代末期から鎌倉時代に至る「技法の変遷」と「表現の進化」を体感できる。



広目天



多聞天



増長天



持国天

右図 東金堂 四天王立像 寄木造
 左図 北円堂 四天王立像 木心乾漆造
 画像 興福寺HPより
 800年頃
 791年



広目天



多聞天



増長天



持国天



広目天



多聞天



増長天



持国天

左図	右図	画像
南円堂	中金堂	興福寺HPより
四天王立像	四天王立像	
寄木造	寄木造	
1189年	1212年頃	
慶派	慶派	



広目天(旧・増長天)



多聞天



増長天(旧・持国天)



持国天(旧・広目天)

第5章 唯識思想と無著・世親立像 ―興福寺北円堂における思想的造形の意味―

1. 唯識思想の基本構造：心がつくる「像」としての世界

唯識思想は、「世界は心の働きとして現れる」という認識モデルである。唯識が扱う「世界」とは物理的世界そのものではなく、心が形成した像（イメージ）として立ち上がる経験世界である。例えば、暗闇で縄をへびと見誤る例はその典型である。縄という物体自体は変わらないが、心が「蛇」という像を作り出すと、人は“蛇がいる世界”を経験し、恐怖を抱く。唯識は、この心が形成した像の生成過程を「三性説（さんしょうせつ）」で分析する。

- 遍計所執性（へんげしよしゅうしょう）： 誤った思い込み
- 依他起性（えたきしょう）： 因縁（さまざまな原因や条件）によって現れる性質
- 円成実性（えんじょうじつしょう）： 錯覚の構造を見抜いた真実の姿

さらに心の働きは、以下のように分類される

- 前五識（ぜんごしき） 視覚や聴覚などの感覚（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識）。
- 第六識（だいろくしき） 自覚的な意識。
- 第七識 末那識（まなしき） 潜在意識であり、自己に執着し続ける心。
- 第八識 阿頼耶識（あらやしき） すべての根本となる識。

この阿頼耶識が前五識・意識・末那識を生み出し、さらに身体や、我々が「世界」であると思っているものを生み出していると考え。あらゆる諸存在が主観的な「識」の現れであるならば、それらは客観的実体をもたない。諸存在は無常であり、生滅を繰り返して最終的には過去へと消え去る。すなわち、般若心経にいう「色即是空（物質的現象には実体がない）」である。唯識思想は、これらの心的構造がどのように像を結び、世界を経験させるかを解明する学問である。

2. 平安末期の興福寺と唯識思想：不安の時代における知的支柱

平安末期は、南都焼討（1180年）や平家政権の動揺、さらに末法思想の広まりによって、人々が深い不安を抱いた時代であった。藤原氏の氏寺である興福寺は政治的中心であると同時に、法相宗の根本道場として高度な学問仏教を担っていた。

法相宗の基盤である唯識思想は、外部の救済に依存するのではなく、心の働きが生み出す錯覚を見抜くことで正しい認識へと立ち返るという、自力的な安心感を与える教えであった。この知的枠組みは、混乱する現実を精神の作用として理解し直すための支柱となり、当時の社会状況において大きな意味を持った。

一方で、当時は浄土宗が大衆の間で急速に広まり、他力救済の思想が勢いを増していた。その中で興福寺は、法相宗の学問的権威を維持できるかという強い危機感を抱いていた。こうした状況において、唯識の祖である無著・世親の像を造立することは、法相宗の正統性を視覚的に示すうえで極めて重要な意義を持っていたのである。

① 運慶自身の思想的深化

運慶は法相宗の寺院環境で育ち、早くから唯識思想に触れていた。焼討後の荒廃を目の当たりにし、「人々の苦しみをどう救うか」という問いに向き合う中で、心の働きを見抜く唯識の智慧は強い説得力を持ったと考えられる。無著立像の慈悲深い伏し目、世親立像の理を求める遠望の眼差しは、唯識を築いた二人の思想を“人間の表情”として彫り出す運慶の試みであり、その到達点であった。

② 無著・世親 二立像の視線が象徴する唯識思想の二つの仕事

- 無著立像：伏し目の内観—第七識（自我）を見抜くまなざし。

無著は、やや伏し目がちに近くを静かに見つめている。これは、外界ではなく自らの心の内側を観察する姿勢を象徴している。唯識では、人間の苦しみの最大の原因は「自我への執着」を生み出す第七識（末那識）にあるとする。怒りや不安が湧いたとき、「これは自分の本心だ」と囚われるのではなく、「これは第七識が作りだした反応に

すぎない」と見抜く態度である。その伏し目は、心の深層へ沈潜し、錯覚の構造を内側から見抜く唯識の実践を表している。

- 世親立像：遠望の俯瞰——第六識による体系化のまなざし。

世親は、遠くを見通すような視線で彫られている。これは、心が世界をどのように誤認するのか、その認識の仕組みを客観的に俯瞰する態度を象徴している。世親は、八識・三性説・諸法無我などを体系化し、唯識を精緻な学問として確立した人物である。

- 無著が内観の「実践」を示し、世親が「理論化」を担う。二像の視線は、唯識思想の「実践」と「理論」という両輪を造形的に表現しているのである。

③ 北円堂の二像は唯識思想の視覚的結晶である

興福寺北円堂の無著・世親菩薩立像は、心の内側を見抜く内観（無著）と、心が作る世界を分析する体系化（世親）という唯識思想の二つの仕事を、視線の方向という最小限の造形で表現し尽くしている。運慶は、興福寺復興の象徴として唯識の精神を彫刻に結晶させた。二像は、平安末期の不安の時代において、心の働きを見抜く智慧を示す“思想の像”であり、法相宗の正統性を支える視覚的中心であった。

文責：さんさん会（芦屋川カレッジ33期）・同好会 さんさんヒストリア リーダー 小林 猛

追補 1180 年南都焼討以降 奈良における運慶が関係した彫像・造像事業（時期順一覧）

1180～85 年： 南都焼討直後の復興期（運慶 30 代前半）

- 1185 年頃 東大寺大仏再建事業に参加（記録上確認） — 運慶は重源の下で造像に従事。

1186～95 年： 復興事業への本格的参加（運慶 30 代後半～40 代前半）

- 1189 年頃 東大寺法華堂関係の造像（推定） — 記録は断片的だが、重源の造像事業に運慶が参加。
- 1195 年頃 興福寺西金堂の諸像（推定） — 西金堂の再建に伴い、運慶工房の関与が指摘される。

1196～1200 年： 興福寺北円堂造像準備期間（運慶 40 代後半）

- 1196～98 年頃 北円堂造像の準備（記録上確認） —
運慶が造像の責任者として活動を開始。息子の湛慶や、康弁らを率いる工房体制が整う。

1201～08 年： 東大寺南大門金剛力士像造立と興福寺北円堂の完成期（運慶 50 代）

- 1203 年 東大寺南大門 金剛力士像（阿形・吽形） — 運慶・快慶・湛慶らの合作により建仁 3 年に造立。
- 1206 年頃 東大寺俊乗堂・重源上人坐像（木造） 運慶の関与が指摘される。
- 1208 年頃： 興福寺北円堂・無著菩薩立像、世親菩薩立像（木造）が完成。
- 1208 年頃： 興福寺北円堂・四天王像（現在の中金堂安置像）を運慶工房にて制作。

1212 年 北円堂諸仏の完成（運慶 50 代後半）

- 1212 年 興福寺北円堂・弥勒如来坐像（木造）を運慶工房の主導で制作。
この後、活動の場を関東（鎌倉幕府関係）へと移していく。